

黄色い夢、青い夢

眉村 卓





集英社文庫

黄色い夢、青い夢

0193-750534-3041

昭和57年7月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 眉村 卓

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋 2-5-10
〒101

電話 東京 (238) 2842 (編集)
(238) 2781 (販売)

印刷 大日本印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。 (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

集英社文庫

黄色い夢、青い夢

眉 村 卓

目次

お隣	八
可愛い仲間	二
復讐	四
黄色い夢	七
成長	一〇
たそがれ	三三
当番	三六
食鬼	三九
帰郷	三

地上と地下	三五
幸運	三九
実験団地	四三
タブー	四五
復活	四八
技術	五三
同期会	五六
検定試験	六〇
場面	六三
通勤時間	六七
さよなら、さよなら	七〇

マジナイ	四
歩道	七
昔の本	八〇
昔のアパート	八三
無念無想	八七
文司君	九〇
部下と上司	九三
ビデオ教材	九七
サイクリング・コース	一〇〇
訪問	一〇六
幻聴	一二三

録音……………	一三〇
役に立つ機械……………	一三六
帰宅……………	一三四
早春……………	一四一
出張所長……………	一四九
達成のあと……………	一五八
新しい課長……………	一七三
日本海3号乗車の記……………	一九〇

黄色い夢、青い夢

お 隣

晩秋で、風は冷えていたが、道夫と明子は元氣いっぱいだった。やっと団地に入れるのだ。引越しの荷物を運び入れながら、明子が頓狂な声をあげた。

「あら、あそこもうちと同じ家具だわ」

見ると、今ついたトラックには、彼らのものと同じ家具が積まれている。

「あり得るさ。ぼくたちのだって規格品だったんだからね」

道夫は笑い、仕事を続けた。今のトラックは彼らの隣らしいが、階段が別なのでどんな人々なのか判らないのだ。明子も笑い出して荷物を持ち直した。

翌日の夕方、団地のマーケットに買物に出た二人は、満足げに自分たちの窓を仰いだ。

「おや、お隣も同じ模様だぜ」

「いやねえ」

だが、これも十分あり得ることだ。二人は間もなくそんなことを忘れてしまった。

冬が来て、樹々は色濃い葉を放し、葉は転がりながら枯れてゆく。

ある日、集金人がやってきて、ふしぎそうな顔をして言ったものだ。

「どうしてこう、いっしょなんですかねえ。このお隣とお宅とは、いつも使用量が同じなんですよ」

明子は気味が悪くなり、道夫にそのことを話した。

「へえ。いやな話だなあ。ガスも電気もだって？ 一体どうしたことだろうな」

「わたし、何だかこわいわ。どんな人がいるのかしら」

「とにかく、今月は全然常識外れの使い方をしてみろよ。それでも同じだというならまた何か考えなくちゃならない」

「いいわ、電気をこれからいつでもつけっ放しにしてみるわ」

だが翌月も、集金人たちは同じことを言い、ふしぎがって帰って行った。

「よし、一度見てみよう」

「お止しなさいよ、かっこうのわるい」

「かっこうどころじゃない」

道夫は隣の階段をあがって行き、自分の室の横にあたる、例の家のブザーを押した。誰も出てこなかった。

名札には名前が入っていなかったので、道夫は管理事務所へ行つた。運悪く管理人はいなかった。

「今度はもつとくわしく調べるよ」

「もういいわ。気にしないようにしましょうよ」

二人はそう決めた。

その夜、皆が寝静まったところパトカーが団地内へサイレンを鳴らしながら入ってきた。窓から見てみると、警官が二人、例の隣から、人をかつぎ出しているではないか。何かの事故らしかった。

騒ぎが静まり、道夫と明子も家の中へ入った。

「あの……」

と明子が言った。

「止せよ、わかつてる」

道夫は青い顔で制した。

「でも、言わずにおれないわ。あそこに事故がおきたんだったら、うちでも事故がある筈じゃない」

「二人のうち、どっちかが、だろう」

「そうよ。どちらか一人でいいの」
道夫と明子は一瞬、目を見合わせた。視線がからみあって、火花を散らした。

可愛い仲間

晩飯のあとで、妻が言った。

「今日ね、下の筒井さんと会ったらね」

「うん」

と私は新聞をひろげながら言う。

「どっちの筒井さんだい」

「ハンサムなほう」

「なるほど」

妻は思い出し笑いをした。

「どうかしたかい」

「それがね、二階の小松さんといっしょに、重そうな荷物を運んでいるの。パッキングケースっていうのかしら、あれ」

「ほう」

「二人とも階段の下へ座り込んで、汗を拭いてるのよ、この寒いのに」

私は、あの小松氏と筒井氏が並んで汗を拭いているのを想像して、思わず笑いだした。

「それから？」

「知らないわ。あがってくる時に見ただけなんだから」

「何を運んでたんだろう」

「さあ」

妻はテレビのスイッチを入れ正月番組に熱中しはじめた。

口実を設けて、私は部屋を出ると、できるだけ落ちついて階段を降りていった。疑念がひよいと浮かんできたからだ。

一階を出ると、周囲を見まわす。風の強い寒夜に誰も外へ出ているようすはない。大丈夫だとは思ったが、念のために階段灯を消した。こうすれば私の姿を見られるおそれは、まずあるまい。階段の裏の、三輪車が置かれているあたりに、小さな金具がある。誰も気がつかないように、ひっそりと埋めこまれた金具だ。力まかせに引っばる。鈍い響きがして、四角い穴があいた。そ

こちら地下への階段が続いているのだ。もちろん、このことは誰も知らない。

私は、最初これを発見した時、ひどく驚いた。が、こんなチャンスをみすみす逃がす手はない。何かに利用しようと考えたという訳だ。

地下室は暗く、いつもの匂いがした。階段に置いておいたポケットライトをとると、冷たいコンクリートの壁を照らす。

何も変わってはいなかった。妻が見た荷物は、この連中とは関係がなかったらしい。

みんな元気だった。寒天状の不定形の塊はじつとして、しきりに眼だけを動かしている。

「じゃ、帰るよ。変な人間が来たら、気をつけてくれ」

私が言うと、塊のひとつが返事をした。

「もう、来た。さっき、来た」

「なんだって」

「それで二つ、人間になって出て行った。もとの人間、小さくして箱へ入れて、捨てた」

それでわかった。この連中はまたもや独断で実力を使ったのだ。

「あんまり勝手に行動しないでくれよ。こっちにも都合がある」

私が言うと、塊のひとつがひくひくと動いた。怒っているのだ。

「ぼくらは早く人間になりたい。もとの人間の記憶、そのままで残るか」

「チャンスを待てよ。そのうちにきつとある」

私は力強く言ってやった。「ぼくだって、もとの人間の記憶も感情も持っているんだからね」
塊たちは喜んだ。この棟もまもなく完了だ。どの棟でも多分そうだろう。私は気をつけて階段を昇って行った。

復 讐

寒かった。街路樹は片手をあげた恰好で風が鳴るのにまかせている。ところどころ灯された電灯が、広い国道に歪んだ輪を投げて、人々はオーバーの襟を立てて急いだ。

明確に塗られた区分通行帯にときどき塵芥が吹かれてきてはその上を転がってゆく。

この国道ぞいに十三階建てのモンスターアパートが立っていた。まる一棟からなる巨大な建物で、都市といっても郊外に近いこのあたりでは、一番大きなビルディングだった。建てられてから、もう随分長くなる。いつもならその数百の窓のいくつかはまだ光に満ちて、通行人の視線を求めるのだが、今夜は真っ暗だった。その暗さは今夜だけのものではなく、これからずっと続く

ものだ。このアパートも古くなったので大修理をしなくてはならず、居住者たちは当分の間、どこか他で暮らさなくてはならなかったのである。

無人のビルは、それが孤立したものであればあるほど、無気味で巨大だ。修理人夫達が引き揚げたあととはなおさらである。

夜半に入っても、風は止まなかった。のみならず雲が低く垂れてきて、柔らかな白いものが舞いおりてきた。

車も人も、なるべく道路ぞいのそのアパートの方は見ないようにして急いだ。寒さも寒さだが、斜めに降る雪の中、くろぐろとそびえ立つそのアパートには、何処かしら人の心を脅かすものがあつたのだ。

車が滅多に通らなくなり、人の気配もなくなった頃、雪は熄んだ。

うっすらと敷かれた雪はほのあかるく国道ぞいの家々を浮かし出した。アパートだけを除いて。アパートは雪にも染まらず、重い沈黙を守ったまま、国道を見下ろしていた。まるで人々が去った事を恨んでかたくなにおのれを閉ざしているようだった。

犬が数匹、ただの広い雪のベルトに還った国道を渡ってしまうと、あとは動くものの気配は絶えた。

その時、けたたましい響きをあげて、二、三台のオートバイが走って来た。ヘルメット、防風